

三河木綿と竹島クラフトセンター

蒲郡と木綿との関わりは古代にまで遡るといわれ、織物産業は何世紀にもわたってこの地域の生命線だった。竹島クラフトセンターでは伝統的な織物技術を体験しながら、その歴史を学ぶことができる。

古記録によると、綿花が日本に伝来したのは8世紀のこと。インド亜大陸からの旅人を乗せた船が、現在の西尾市（蒲郡のすぐ西）に漂着した。この旅人が運んできた綿花の種が、日本で初めて綿花栽培を試みるきっかけになったと言われている。国内での綿花栽培が本格化したのは16世紀に入ってからだが、三河地方（現在の愛知県の東半分、蒲郡市を含む）はすぐに一大産地としての地位を確立した。

蒲郡の木綿産業は、木綿の衣服が手ごろな価格で庶民に普及した17世紀以降に盛んになった。明治時代（1868年～1912年）には三河木綿と地元の織物職人による独特の縞模様が高い評価を得たが、蒲郡で織物生産の頂点に達したのは第二次世界大戦後の数年間で、手ごろな価格の織物を求める全国的な需要に応えるため、市内外の工場や工房が猛烈な勢いで織物や衣料品を生産した。

繊維産業はもはや三河の重要な経済的存在ではないが、木綿生産の伝統と伝統的な工程は地元の誇りの源泉であり続けている。竹島クラフトセンターではインストラクターが三河の技法を使ったコースター作りを段階的に教えてくれる。参加者は種綿から綿繊維を分離する方法、綿を糸にする方法、そして伝統的な手織り機でコースターを織る方法を学ぶ。

竹島クラフトセンターはホテル竹島と竹島に渡る橋の近くにある俊成苑に位置する。